

## 幸福な結末

### —御伽草子と王朝物語—

福田 景道

#### 一 『文正草子』の「めでたさ」

昔より今に至るまで、めでたきことを聞き伝へ、中にも、賤しき者の、ことのほかに成り出でて、初めより終りまで、つひにも憂きことなくめでたきは、常陸の国の塩売文正と申しける者にてぞ侍りける。(『文正草子』一四頁)<sup>(1)</sup>

御伽草子の代表作『文正草子』の冒頭である。これから展開する物語が、庶民の代表的立身出世譚であり、古今の「めでたきこと」の典型であることが予告されている。事実、作品世界は「めでたさ」に覆われる。それに即応して、女子の嫁入り品や町家の正月の読み始めに多用されるなど、祝儀性・祝言性を特色として普及したらしく、多くの伝本を残している<sup>(2)</sup>。また、文正とその家族の生涯には、類似の諸作品と比較して苦難・苦行が著しく少なく「もの憂きことなくめでたき」ところに特色があり、これも「めでたさ」に密接に関係すると言われる<sup>(3)</sup>。

『文正草子』の「めでたさ」は、まず、常陸国の塩売り文太(文

正)が無一文から精励して長者になる経緯に示される。巨万の富を得て「明暮、栄華に誇り慰みけり」(二二頁)という境遇に至るのである。ところが、跡を継ぐべき子供がいないう欠点を指摘され、「めでたさ」の不完全さが露呈する。そこで、文正は、鹿島明神に祈願し、その靈験により二人の光るばかりに美しい娘を得るのである。文正は男子でないことに憤るが、娘たちの美しさに期待して大切に養育することになる(姉妹は蓮華・蓮と命名された)。

ここまでで、十分にめでたい生涯である。普通の長者譚であれば、まもなくこの娘たちが婿を取って末永く栄えたという結末を迎えるであろう。御伽草子にもこの段階で終わる場合が少なくない。『一寸法師』『小男の草子』『瓜姫物語』『物くさ太郎』『猿源氏草子』『鉢かづき』『一本菊』『もろかど物語』などの著名な諸作品は、主人公がハンディキャップや災難を克服して成長し、一家を構えて繁栄したところで終結している。『宇津保物語』『落窪物語』や『源氏物語』第一部など早期の作り物語も同様に一門の栄華をもって大団円となる。しかし、『文正草子』には長大な第二幕が用意されていた。『文正草子』は一応の栄華獲得の後に本当の物語が展開する特

異な作品なのである。

文正の物語の第二幕は一種の求婚譚と見られる。成長した娘たちの圧倒的な美しさに関東一円の有力者が競って求婚してくるのである。こうして作品の主要部は婿選びに占められる。

ところで、栄華確定後に実質的なストーリーが展開する物語と言えば『竹取物語』がある。竹の中から三寸ばかりの小さ子<sup>(4)</sup>を見つけて養育した竹取の翁が長者になるのは冒頭近くである。

たけとりの翁、竹を取るに、この子（かぐや姫）を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとくに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。

この児、やしなふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。帳の内よりいささず、いつきやしなふ。

この児のかたちの顕証なること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。

翁、竹を取ること、久しくなりぬ。勢、猛の者（勢威のある富豪）になりけり。（『竹取物語』一八・一九頁）<sup>(5)</sup>

と、翁が黄金を手に入れて長者（勢猛の者）になり、さらに「苦しきこと」も「腹立たしきこと」もなくなり、精神面でも満たされていた様が、きわめて簡潔に語られている。これは昔話などの典型的結末部に近似するが、『竹取物語』という作品においては発端部にすぎない。『文正草子』と同様に、夢のような幸福を手中にしてから改めて真の物語が展開するのである。異常出生譚と致富長者譚で形成される多くの物語がこの段階で完結するにもかかわらず、両作品では軌を一にしてそのような結末が本格的な物語世界の端緒になる。この共通性は、他の初期物語や御伽草子に対しては例外的であ

ると断じてよいであろう。しかし、両作品の結末は正反対になる。『竹取物語』は、愛娘を失わせることによつて、表面的な富裕がそのままでは幸福と結びつかないことを明示する<sup>(6)</sup>。通行していた物語や伝承に対するアンチテーゼにもなる斬新な構想である。一方、『文正草子』では、通例の長者としての幸福には満足せず、それをはるかに超えた極限的な栄華が顕現される。娘を失うこともない。そこに竹取の翁の悲惨さはない。翁の悲劇が克服された状態の一つが描き出されていると言えるかもしれない<sup>(7)</sup>。『文正草子』は究極の「めでたさ」と幸福な結末を追求するのである。

## 二 『文正草子』の幸福な結末

さて、文正の二人の娘は、かぐや姫と同じように複数の貴顕から求婚され、拒否し続ける。まず、関東八ヶ国の大名がわれもわれもと名乗りを上げるが、二人は東国生活を忌避し、都への憧憬から意に従わない。「人とならば、都に跡をとどめて、しかるべきことを見聞きたらば、世にあるかひもあらめ、ただ女御、後の位を望み給ふ」（二二頁）というのである<sup>(8)</sup>。

次に求婚するのは、文正がかつて仕えていた鹿島神宮の大宮司である。この大宮司は極限的な「長者」として登場する<sup>(9)</sup>。その大宮司が自分の「第一の宝」である息子を文正の婿にするよう申し入れるが、娘たちは激しく拒絶してしまふ。その次には、都から来た国司が求婚するが、やはり受け入れられない。最後に娘たちに恋情を抱くのは、国司から彼女たちの噂を聞かされた関白家の十八歳の若君、二位の中将であった。彼は恋慕するあまりに商人に扮して都から下ってくる。ここからは中将に叙述の中心が移って、「貴種流離譚」様の恋物語が展開し、最終的に中将は文正の姉娘（蓮華）と結ばれる。それを受けて「文正が果報、まことにいふもおろかなり」

(八〇頁)、「みなみなうらやみめでたがりあへり」(八一頁)と言われ、文正家の幸福は極みに近づく。姉娘にとつて、関白の跡取り息子は婿として満足できるものと読み取られるのである。

『文正草子』は次に妹娘(蓮)の婚姻を物語る。

さるほどに、時の帝、このよし(関白の息子が文正の姉娘と結婚したことを)きこしめして、「文正が妹娘を後に立て参らせよ」と、宣旨下りければ、文正、喜びののしることは限りなし。されども、文正も、母も、この姫君に離れんことを歎きけり。さる程に、このよし申しければ、帝、重ねて宣旨をなされ、「さるらば、文正も、母も、同じく御供して上るべき」よし、宣旨なりければ、喜ぶこと限りなし。同じく四月上旬の頃、後に御立ちとぞきこえける。四方の蔵より七珍万宝を取り出し、銀、金にて御輿を飾り給ふ。(中略)

さて、帝、その日にもなりければ、内裏には、公卿、殿上人、われもわれもと出仕せられける。帝は、かねておぼしめしけるより、姿有様たぐひなく、うつくしくありければ、なほあさからずおぼしめし、それよりは、片時も離れさせ給はず。御仲めでたかりける。さる程に、文正も昇殿を許されて、中納言になされけり。母も、三位にぞなり給ふ。やがて、后、ただならずなり給ふ(身重の身になられた)。幾程なくて、光る程の皇子、御誕生ありける。帝、御喜び限りなし。その後、文正、二位の大納言にぞなり給ふ。皇子七歳の御年、御位を譲り給ふ。姉君も、若君、姫君まうけ給ふ。(その若君が)やがて、関白になり給ふ。姫君は、後に立ち給ふ。文正程、末繁昌、めでたき者あらじと、うらやまぬ者はなかりけり。めでたかりしことどもなり。この草子御覧せん人は、現世安穩にて、心に思ふこと、よろづかなふなり。めでたし、めでたし。(『文正草子』八五―八九頁)

このようにして、文正の妹娘は時の帝に入内する。当初の「ただ女御、後の位を望み給ふ」(三二頁)という願いが叶えられたのである。文正とその妻も上級貴族にまで立身した。また、二人の娘の子どもたちが帝・后・関白になった「末繁昌」のめでたさが記され、幸福な物語は遂に終幕する。子孫の繁栄によってこそ、人生は幸福であったと言ひ得るからである(10)。「ことのほかに成り出でて、初めより終りまで、つひにも憂きことなくめでたき」(一四頁)文正の最終的到達点は、自身は二位大納言、妻は三位、長女は関白北の方、次女は后、孫は帝・関白・后に並び立つというものである(図1参照)。地方や東国の長者ではなく、日本国内で望み得る最高の栄華ではあるが、自分自身が帝王になるという発想はない。また、日本の枠を越えた繁栄も視野に入っていない。これを文正の栄華の到達点、栄華観の限界点と見なしてよいであろう。

実は、これは王朝物語文学で一般的に志向される地位に一致するのである。『文正草子』は王朝物語型の栄華構図をもって物語を終結させていて、王朝的価値観を受け継いでいると言えるであろう。「栄華」の本質が本人が富み栄えるだけでなく、子孫の繁栄をも意味するという王朝的栄華観(11)に照らししても齟齬はない。

### 三 中世王朝物語の幸福な結末

王朝物語と御伽草子との間の文学史上の空白期間は鎌倉時代に成立した物語文学作品によって埋められていると思われる。かつては、

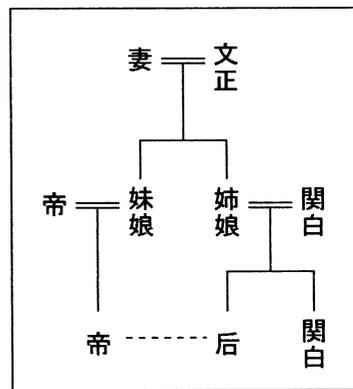


図1 『文正草子』の栄華構図

これら鎌倉時代以降に成立した物語文学は「擬古物語」または、「鎌倉（時代）物語」と呼ばれて、平安時代以前の本格的な王朝物語とは明確に区分されて、注目されることもほとんどなかった<sup>(12)</sup>。ところが、近年「中世王朝物語」という述語が一般化し、鎌倉時代と平安時代の物語の共通性と連続性が重視されるようになったと思われる<sup>(13)</sup>。九世紀から十五世紀頃まで続いたことになる王朝物語史を継承するのが御伽草子であり、『文正草子』の栄華観はこれら一連の王朝物語史全体の流れを受け、関連すると考えられるのである。たとえば、中世王朝物語『小夜衣』の結末部などが『文正草子』に近似する。女主人公「山里の姫君」が苦難の末に兵部卿宮（後の帝）と結ばれて中宮になった後に、彼女の子孫繁栄に筆が及んでゆくのである。

年月過ぎゆけば、（山里の姫君Ⅱ中宮は）若宮も姫宮も、あまたまうけ給へり。（中略）

年月過ぎ行きて、姫宮、十になり給ひぬれば、春宮の女御になり給ひぬ。うつくしき御あはひども、めでたし。今は、一の宮をぞ、御位にも、とおぼしめしける。かかる御宿世どもの、めでたく思ふさまなる事ども、なかなか書き尽くすべくも侍らず。ただ、見給はん人々、おぼしやり給へ。（中略）

人のめでたきためしには、山里の姫君にまさる人あらじ、と見えたり。見給はん人々も、思ひやり給ふべきなり。（『小夜衣』二一〇・二一一頁）<sup>(14)</sup>

と、山里の姫君の娘が春宮の女御になって将来の立后が約束され、長男が春宮、さらには帝位に即くことが予告され、「人のめでたきためしには、山里の姫君にまさる人あらじ」と作品が結ばれている。山里姫君は撰関家の出身なので、一族による撰関職・帝・后の独占をもって至上のめでたきと見なしているに違いない。同様に一族の独占的栄華で終結する王朝物語は多い<sup>(15)</sup>。たとえば、『住吉物語』

には、

年月行く程に、大將殿には、父、関白譲り給ひぬ。いよく、末の世、頼もしくぞ侍ける。若君は元服させ給ひて、三位の中將とぞ申ける。姫君は、十八にて女御に参給ひける。侍従は大人女にて、万に大事の人にぞ思はれて、内侍に成ぬ。見聞く人、羨みあへり。大將、姫君、末まで繁昌して、めでたくぞおはしける。（『住吉物語』下、三四八・三四九頁）<sup>(16)</sup>

とあり、住吉の姫君と夫関白との間に生まれた男女が、将来の撰関といふべき三位中將と后候補の女御になったことが「末繁昌」と結びつけられている。一家の未来に栄華独占の光輝が訪れるのは明白である<sup>(17)</sup>。

このほかの中世王朝物語では、『海人の刈藻』『我身にたどる姫君』『木幡の時雨』『白露』などの結尾が類同する。

『我身にたどる姫君』の場合は、三世代にわたる婚姻と密通の繰り返して、撰関家系と皇室系の血統が一体化し、宮廷社会を統一する巨大な一家が現出するという構図で大尾に至る<sup>(18)</sup>。これは『小夜衣』『住吉物語』『文正草子』型栄華の拡大されたもので、本質的には相違しないと思われる。後掲する『海人の刈藻』も同様である。また、そのほかの王朝物語の主人公たちが到達する栄華も、帝・后・撰関とその縁戚の範囲を出るものではない<sup>(19)</sup>。

以上のことから、『文正草子』の繁栄の構図は、王朝物語風の貴族栄華の図式を踏襲し、その中に庶民文正が入り込んだものと言い得る。子孫で帝・后・関白を占有するのは非貴族の栄華観ではない。本来であれば、帝后撰関の外戚は皇族と貴族の中にしか存在しないはずであるが、『文正草子』では奇跡的に文正夫妻がその位置を占めることになる。文正の娘が二人なのは、皇室と撰関家の両方の外戚になる必要があったからである。この意味で、文正の栄華は王朝物語型の「めでたき」ことの典型にほかならない。

四 幸福な結末と長寿

『文正草子』は、最も多く読まれた御伽草子であり、数多くの異本をもつ。右に引用したのは筑波大学附属図書館蔵絵巻『文正草子』であるが、流布本系の諸本とはかなり差があると云われる<sup>(20)</sup>。たとえば、江戸時代に広く流布した御伽草子板本の結末部には次のように多大な相違がある。

よき子をもちぬれば、文正七十にて宰相にぞなされて、引あげ給へば(昇殿させてもみると)、五十ばかりにぞ見えにける。姫君(文正の妹娘)は女御になり給ふ。さるほどに例ならず悩み給へば、みかどをはじめ騒ぎ給へば、ひきかへ御よろこび限りなし。十月と申(す)に、御産平安し給ひて、皇子をぞ生み給ふ。御乳母には、関白殿の姫君、中宮に参り給ひぬ。又祖父御の宰相(文正)は、やがて大納言になされけり。いやしき、塩売の文正なれども、かやうにめでたき果報共、中(く)申(す)に及ばれず。母も二位殿とぞ申(し)ける。いかなる過去の行ひにやらん、みなみな繁昌して、栄花にほこり、年さへ若く見え給ひ、下人若党多く召し使ひ、女房たち上下にいたるまで人に用ひられ栄耀にほこり給ふ。

さるほどに大納言は、高き所に塔をたて、大河に舟をうかめ、小河に橋をかけ、善根数をつくし給ふ。いづれも御命、百歳に余るまで保ち給ふぞめでたき。まづくめでたきことのはじめには、此さうしを御覧じあるべく候。(御伽草子板本『文正草子』五六・五八頁)<sup>(21)</sup>

ここで留意されるのは、前掲の筑波大学本と比べて叙述が詳しい点とともに、年齢への言及が目立つ点である<sup>(22)</sup>。そこでは、文正は実年齢よりかなり若々しく、文正とその関係者がいずれも百歳以

上の長寿者であったとされる(傍線部)。すでに述べたように、長寿は栄華と不可分の関係にあるのである<sup>(23)</sup>。このような長寿の賞賛は他の御伽草子にもしばしば見られる。たとえば、『物くさ太郎』の主人公は「百二十年の春秋を送り、御子あまた出で来て」<sup>(24)</sup> 栄華を極めている。

また、王朝物語『住吉物語』の異本にも同様の記述が見いだせる。たとえば、野坂家蔵本には、

かくて、北の政所、今は思ふ事なくて、御命は、住吉の松の千歳を譲られ給ひしかば、末(まで)迄(まで)遙(はる)く(はる)と栄(さか)へ給ひて、命(いのち)長尾の峰に生ひたる菅の根よりも、長(なが)く(はる)しき御代にて、御年は、九十九迄(まで)、保ち給へる。御果報、目出たき例にも、これを引べし。(野坂家蔵『住吉物語』三九三頁)<sup>(25)</sup>

という一節があり、女主人公の寿命は九十九まで保たれたと説かれる。

王朝物語でも、左に引用するように『海人の刈藻』<sup>(26)</sup>の末尾の栄華の大団円の場面に長寿者が登場する(傍線部)。

「一の宮(女主人公の娘の夫)ねび整ほらせ給ふ。春宮(女主人公の甥)、はた大人しき御ありさまなれば」とて、今年御国譲りのことありて、(中略)やがて一の宮、春宮に居させ給ふ。殿の女御(女主人公の娘)、后に立ち給ふ。めでたきこと限りなし。

嵯峨の入道殿、この后立ちを見給はではとて、あながちに御車にて出で給ふぞあはれなる。そののち、御齡九十一にて、遂に隠れ給ふ。めでたき例にぞ人申しける。

殿の中納言(女主人公の長男か)、今は大納言と聞こゆ。左大臣空き給へるに、右の大臣上がり給ひて、大將殿(女主人公の妹の夫)、右大臣と聞こゆ。大納言を大將と聞こゆ。権の中將(女主人公の次男)、中納言と聞こゆ。この御末々栄えさせ給ふこと、めで

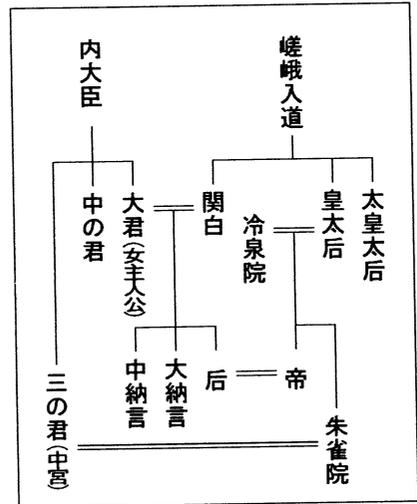


図2 『海人の刈藻』の栄華構図

命さへ御心のままなりける」と、世人も申し伝へけるとぞ。

(『海人の刈藻』巻四、二〇八・二〇九頁)<sup>(27)</sup>

この物語も最終的に女主、人公大君(関白の北の方)の一族が帝・東宮・后を独占し、廟堂の上位に居並ぶ壯観を描いて幕を閉じる(図2参照)。注目すべきは、その繁栄描写の間に長寿者の動向が差し挟まれる点である(傍線部)。「嵯峨の入道殿」は、女主人公の夫の父親で、前関白でもある。彼はこれまでも少なくとも二人の実娘の立后に直接関与している。それにもかかわらず、孫娘の立后を見ることに執着したことになる。子孫の繁栄を見るためにだけに生命を保ったという印象さえある。また、「内大臣」は女主人公の実父である。彼は『文正草子』の文正に相当し、長寿によってこの物語のすべての栄華を目撃したことになる。すなわち、『海人の刈藻』の最後に脚光を浴びる二人の老人は、栄華すなわち子孫繁栄を「見る」とことと長寿とが結びつけられている存在なのである。

このように考えると、『文正草子』や野坂家蔵本『住吉物語』結尾の長寿者も、栄華(子孫繁栄)を保障するだけでなく、子孫の有様を「見る」という機能をも有する可能性が否定できない。

たかりしことなり。

遂に右大将(女主人公の甥)は、殿の御婚にてかしづき給ふ。中納言は朱雀院の姫宮を預かり奉り給ひて、とりどりの御ありさまを内の大臣見奉り給ひける。「御

## 五 継子物語の結末と長寿

ところで、『住吉物語』は継子虐めの物語の代表作である。この作品の影響とも考えられるが、継子虐めの物語のほとんどが『住吉物語』と同じように王朝物語型の栄華で物語世界を終結させているように思われる。『落窪物語』は言うまでもない。前掲の『小夜衣』も継子物語の系譜に属し、継子虐め譚が王朝物語から御伽草子へ流れてゆく過程の中間に位置すると言われている<sup>(28)</sup>。『木幡の時雨』『白露』などにも明らかに継子譚が潜在している<sup>(29)</sup>。

また、継子虐めの王朝物語『いはや』(散逸)の改作と考えられる御伽草子『岩屋の草子』<sup>(30)</sup>の最末尾は、

さる程に、姫君十四にて女御に参らせ給ひぬ。若君は後に関白に成給ひ、かくて、対の屋北の政所とて、めでたく栄へさせ給ひける。(『岩屋の草子』二六七頁)<sup>(31)</sup>

とあり、やはり同様に后(女御)と関白とを栄華の上限とする王朝物語型である。それに加えて『岩屋の草子』の慶長十三年写本の末尾には主人公・対の屋姫が百二十歳まで生きたと記される点が目立つ。他に継子虐めの御伽草子『秋月物語』などが同型の栄華呈示で終結している<sup>(32)</sup>、王朝物語型の栄華構図による結末、長寿者の登場、継子虐めの構想などを共有する、作り物語と御伽草子にまたがる作品群の存在を仮定してもよいであろう。

『文正草子』に継子物の要素はないが、文正夫妻の婿中将对する態度、中將の両親の嫁である姉娘への感情には、継子虐めに類する敵対心の兆しが見られる。特に、文正の妻が、商人の正体が二位の中將であることを知らず娘の結婚相手は商人であることに憤り、「商人を簪に取ることを知らず娘の結婚相手は商人であることに憤り出す」という態度は手厳しい。中將の母は文正の姉娘に

会ってその心身のすばらしさにうち解けるが、一步間違うと嫁虐めに陥る可能性はあったであろう。しかし、すべてが友好的に進展した。そのような敵対関係が現実のものとならないところに『文正草子』の「めでたさ」があるとも考えられる。

さて、継子虐めの物語としては『落窪物語』が無視できない。現存する継子物の中では最も古く、最も長いのがこの作品である。その栄華の大団円は次のように語られる。

左の大臣(主人公の夫)を太政大臣には、なしたてまつりたまふ。世人、「まだ四十になりたまはで、位を定めたまへることよ」とおどろきあへり。

御女の女御(主人公の娘)、後のみたまひぬ。宮の亮に、少将(主人公の異母弟)を中將になしてなむ、せさせたまひける。

兵衛佐たち、皆よろこびしたまふ。太郎の兵衛佐(主人公の長男)、左近衛の少將になりたまひぬ。(中略)大臣の北の方(主人公)御さいはひを、「めでたし」とは古めかしや(陳腐な言い方です)。「落窪に単の御袴のほどは、(かく太政大臣の御北の方、後の母)と見えたまはざりき(予想できません)した」とぞ、なほむかしの人々(昔のことを知っている女房たち)は言ひけるに、みそか言も言ひける(世間の人々もそんな噂話をした)。

(中略)(主人公)かく栄えたまふを(よく見よ)とや神、仏も思しけむ、(主人公の継母は)とみにも死なで、七十余までなむいましける。(中略)衛門(主人公の侍女あこぎ)は宮の内侍になりけり。(中略)

この少將の君達(主人公の長男と次男)、一よろひになむなりあがりたまひける。(中略)左大將、右大將にてぞ、つづきてなりあがりたまひける。母北の方(主人公)、御さいはひ言はずとも、(げに)と見えたり。帥(主人公の異母妹の夫)はこの殿の御徳に(主人公の夫のおかげで)、大納言になりたまへり。(中略)かの

典薬助は蹴られたりしを病にて死にけり。「これかくておはするも見ずなりぬるぞ口惜しき。などてあまり蹴させけむ。しばし生けておいたべかりける(もうしばらく生かしておいたほうがよかつたなあ)」とぞ男君(主人公の夫)のたまひける。女御の君(主人公の夫の姉か)の御家司に和泉守(あこぎの夫)なりて、御徳(主人公夫妻の恩顧)いみじう見ければ、むかしのあこぎ、今は内侍のすけになるべし。「典侍は二百まで生ける」とかや。(三四〇〜三四三頁)

『落窪物語』の主人公「落窪の君」は、太政大臣家の御曹子道頼と結ばれて継母の虐めから逃れることに成功し、一家が隆盛する中で物語の終幕に至る。そこでは、夫が太政大臣に昇進して最高の地位に就き、長男と次男が左右の近衛大將を独占し、姻族・血族が朝廷の要職に居並び、長女は后(中宮)になって次代の繁栄も約束される、という幸福な結末が語られる(図3参照)。この作品の成立は十世紀末頃と考えられるが、摂関政治体制の完成・成熟を知らないう段階の著作であることを考えると、極限に近い栄華構図であると見えよう。

そのような栄華構図の間隙をぬうように、長寿に関する叙述が散

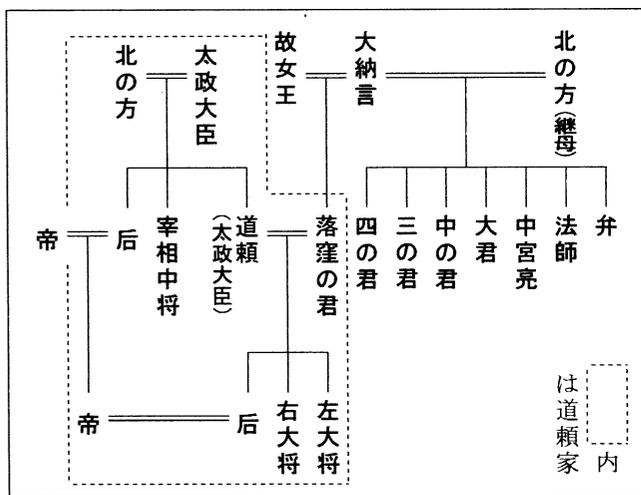


図3 『落窪物語』の栄華構図

在している（傍線部）。特に、継母の長命を、かつて虐待した主人公の栄えるさまを「よく見よ」という神仏の意志によるものと見なす箇所が目される。栄華の当事者側と敵対者側の相違はあるが、『海人の刈藻』と同様に栄華⇨幸福を「見る」ための長寿なのである。男君が典薬助をもう少し生かしておきたかったのも、主人公の幸福を見せたかったためと明言されている。栄華の本質である子孫の繁栄は、その性格上、長寿でなければ「見る」ことができないのである。

さらに『落窪物語』は主人公を援助した功労者あこぎがないのすけ典侍に立身して、二百歳という驚異的な寿命を得たという風聞をもって全編の結末としている点も看過できない。あこぎはなぜ二百年も生きただけであろうか。

ただし、この部分については問題がある。「典侍（内侍のすけ）」は「典薬助」であるべき可能性やこの部分が後代の加筆である可能性などが指摘されている<sup>(35)</sup>。しかし、現段階ではいずれも確定的とは言えないので、ここでは近世以来の通説とも言うべき「典侍」説に従っておく。そこで、引用本文のように、あこぎが二百歳まで生きたことをもって一作品の掉尾を飾る形態を認めるならば、これも主人公一家の栄華を「見る」ためであったと考えるのが自然であろう。

このようなあこぎの長寿と役割は『大鏡』の夏山繁樹の長寿の意味と符合すると考えられる。すでに論及したように、夏山繁樹が百四十歳（あるいは百八十歳）の超人間的な長寿を保ったのは、尊崇する主君藤原忠平の栄華（子孫の繁栄）の永続を見守り、祝福するためであった<sup>(36)</sup>。忠平の子々孫々が「いよいよひろがり栄えおはします」のを見届け、「よろこび申させむ」（『大鏡』「藤原氏物語」三六五頁）<sup>(37)</sup>のために異界的な時間の中を生き続けたと見なすことができるのである。落窪の君の幸福のために献身的に尽くしたあこ

ぎの超人間的な長命は、落窪の君の栄華（子孫繁栄）を「見る」ためであり、祝福するためであったと認めるべきであろう。

継子虐め物語の結末に定型的に描かれる王朝的栄華とは、帝后摂関の血縁上の鼻祖になることである。「いじめ」というある意味では最悪の事態から究極的な栄華への移行がこの種の物語の基幹を形成するとも考えられる。また、その栄華の永続を「見る」者の存在が要求されているのも軽視できない。

栄華が永続するものであれば、それを「見る」者は常識を超えた長寿者でなければならぬ。栄華の鼻祖も長寿でなければ栄華を確立し享受することができないとも言える。継子虐め型の御伽草子にも同様の栄華を追求し、同様の長寿者を設定する傾向が顕著である。これこそが個人よりも家系を重視する王朝的物語世界の幸福な結末なのである。

本稿の劈頭に取り上げた『文正草子』には、継子虐めの要因はない。これは「めでたさ」のみを徹底的に追求するために栄華の対極にある「いじめ」を忌避したためではないであろうか。栄華を相対的に際立たせる苦難はこの物語には必要ないのである。しかし、流布本系の諸本に、七十歳の文正が五十歳ばかりにしか見えなかったことや一家の者が百歳以上の長命に恵まれたことが明記される点では、如上の作品群に属すると言えるであろう。

#### 〔注〕

(1) 『文正草子』本文の引用は、大島建彦校注・訳「文正草子」(『室町物語草子集』新編日本古典文学全集63、平成十四年、小学館刊)により、( )内に適宜説明を補う。以下同じ。

(2) 市古貞次「文正草子」(同他編『御伽草子・仮名草子』鑑賞日本古典文学第26巻、昭和五十一年、角川書店刊)、佐竹昭広「文正草子」(『日本古典文学大辞典』第五巻、昭和五十九年、

岩波書店刊)、伊藤慎吾「文正草子」(西沢正史他編『中世王朝物語・御伽草子事典』平成十四年、勉誠出版刊)など参照。

(3) 浅見和彦「文正さうし—嫁入本の構造」(『国文学解釈と教材の研究』第二十二巻第十六号、昭和五十二年十六月)。

(4) 三寸は約十センチメートル。この設定は御伽草子『一寸法師』『小男の草子』などととも、小さ子譚・申し子譚と捉えられ、世界的に流布する親指小僧型の説話にも属する。

(5) 『竹取物語』本文の引用は、片桐洋一校注・訳「竹取物語」(『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集12、平成六年、小学館刊)により、( )内に適宜補足説明する。以下同じ。

(6) 拙稿「不老長寿の意義と物語の世界—竹取の翁と夏山繁樹—」(『福祉文化』創刊号、平成十三年三月)参照。

(7) 『竹取物語』が『文正草子』のような単純な幸福を志向するものでないの言うまでもない。むしろ『文正草子』型の「栄華⇨幸福」観の定着に対する疑問が呈されると言うべきであろう。また、『竹取物語』の竹取の翁と媼を幸福に導くというかぐや姫の役割がこの段階でほぼ完全な成し遂げられているのに対して、『文正草子』の文正夫妻の娘の存在に基づく幸福はこの段階ではまだ達成されていない点などの相違点はあるが、本稿では通常の長者譚の結末部に類似する点のみに注目している。

(8) このような娘の深意を父母がまったく理解しないで、それぞれの求婚を喜ぶという構図も『竹取物語』と一致する。ここまでの展開に限ると両作品の影響関係を予測することも可能であるが、本稿では言及しない。また、文正の二娘は最後に思い通りの相手と結婚するが、これは遂に誰とも結ばれないかぐや姫の運命と大きく異なる。

(9) 四方に蔵を建てて内外の財宝で満たし、広大な土地を領有し、数千人を召し使う壯観が明示され、「第一の宝には、若君五人おはしける。」(一四頁)と記される。特に奉公人の「郎等、恪勤、雑色の中、上中下の女八百五十人、下衆女三百人、草刈千人」(同)は、文正の「家の子、郎等、恪勤、雑色に三百人、草刈百人、上下の女房百人、下女百人、後見三十人」(二〇頁)をはるかに凌ぐ。

(10) 拙稿「長寿と幸福—『大鏡』世界の栄華をめぐって—」(『福祉文化』第二号、平成十五年二月)など参照。

(11) 芳賀矢一「歴史物語」(『芳賀矢一遺著』昭和三年、富山房刊)、松村博司著『栄花物語全注釈(三)』(昭和四十七年、角川書店刊。一九九〇二〇一頁)、同他著『栄花物語・紫式部日記』(昭和五十一年、角川書店刊。一〇五・一〇六頁)など参照。

(12) 昭和五十八年刊行の『物語文学』(研究資料日本古典文学1、明治書院)や同五十九年刊行の『日本古典文学大辞典』第一巻(岩波書店)でも依然として「擬古物語」として扱われていた。また、昭和五十七年から刊行の「体系物語文学史」全五巻(有精堂)では第四・五巻が「鎌倉物語」に充てられ(この二巻は平成元年刊)、「鎌倉時代物語集成」全八巻(笠間書院)の刊行が昭和六十三年に開始されてこの期の物語に新しい評価の機会が与えられたが、平安時代の物語とは一線を画されていた。

(13) 平成七年に「中世王朝物語全集」全二十二巻(笠間書院)の刊行が始まり、ほとんど本文に接する機会さえなかつた鎌倉期以降の作り物語が、現代語訳を伴って読みやすい形態で一般に公開されたのを画期とする。並行して、大槻修著『中世王朝物語の研究』(平成五年、世界思想社刊)、大槻修・神野藤昭夫編『中世王朝物語を学ぶ人のために』(平成九年、世界思想社

刊)、田淵福子著『中世王朝物語の表現』(平成十一年、世界思想社刊)、辛島正雄著『中世王朝物語史論』上・下(平成十三年、笠間書院刊)、神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典』(平成十四年、勉誠出版刊)などが上梓され、「中世王朝物語」の概念が定着したと考えられる。今井源衛・稲賀敬二・大槻修・鈴木一雄・樋口芳麻呂・三角洋一による座談会「変貌する中世王朝物語群像」(『リポート笠間』No.38、平成九年十月)参照。なお、平安と鎌倉の物語の連続性への言及は、今井源衛「王朝文学の特質―その広さ」(『国文学解釈と教材の研究』第二十六巻第十二号、昭和五十六年九月)などが早い例ではないかと思われる。

(14) 『小夜衣』本文の引用は、辛島正雄校訂・訳注『小夜衣』(中世王朝物語全集9、平成九年、笠間書院刊)により、( )内に適宜補足説明する。

(15) 『住吉物語』『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』(第一部)『今とりかへばや物語』『夜寝覚物語』『海人の刈藻』『木幡の時雨』『白露』『我身にたどる姫君』などが確実に該当する。

(16) 『住吉物語』の本文は、稲賀敬二校注「住吉物語」(『落窪物語・住吉物語』新日本古典文学大系18、平成元年、岩波書店刊)による。底本は慶長古活字十行本。なお、『住吉物語』には異本が多く、諸本間に大差がある。現在入手しやすい三角洋一校注・訳「住吉物語」(『住吉物語・とりかへばや物語』新編日本古典文学全集39、平成十四年、小学館刊。大東急記念文庫蔵一位局筆本)は引用した本文に比較的近い方だが、次のように「末繁昌」「めでたさ」への言及がないなど異同がある。

かくて過ぎゆくほどに、大將殿は殿下譲られたまひて、その勢ひ並びなし。若君も元服したまひて、三位の中將とぞ申しける。姫君十七にならせたまふ年、女御に参りたまひけり。

侍従は内侍になり、世に人に聞きしのばれてぞありける。住吉の姫君をば、北の政所とぞ申しける。(二三五頁)

(17) 『住吉物語』の原作本(古本)の成立は円融朝(九六九―九八四)頃と考えられるが、今は散逸している。現存するのは改作本で、改作時期は院政期から鎌倉時代前半頃までの広い範囲に諸説が分散している(三角洋一「解説」(『住吉物語・とりかへばや物語』新編日本古典文学全集39、平成十四年、小学館刊)など参照)。平安的要素と鎌倉的要素が併存する王朝物語である。また、原作本と現存本との差違を微少なものと見る見解が少なくない(上坂信男著『物語序説』(昭和四十二年、有精堂刊)など)。したがって、『源氏物語』以前の古い物語の構想と中世王朝物語の構想とが混在している作品なのである。

(18) 平林文雄「我身にたどる姫君の主題」(同著『我身にたどる姫君(全)』昭和五十九年、笠間書院刊)など参照。

(19) 拙著『歴史物語と物語文学の相関に関する研究』(平成六〇―八年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、平成九年三月)参照。

(20) 大島建彦「作品解題」(前掲書(一))。

(21) 『文正草子』御伽草子板本の引用は、市古貞次校注『御伽草子』(日本古典文学大系58、昭和三十三年、岩波書店刊)により、( )内に補足説明を加え、適宜傍線を施す。

(22) 『竹取物語』の竹取の翁は、物語の初めの方では自らの年齢について七十歳を超えていると明言するが、終わりの方では五十歳ばかりと言っていて矛盾している。これは『竹取』の瑕疵であると思われるが、七十歳の文正が五十歳程度に見えたという記述と数値が一致する点が無視できない。両作品の影響関係についてはここでは論究しない。

(23) 前掲拙稿(10)。

- (24) 大島建彦校注・訳「ものくさ太郎」(前掲書(1))一七二頁。
- (25) 野坂家蔵『住吉物語』は、稲賀敏二校注「住吉物語」(『落窪物語・住吉物語』新日本古典文学大系18、平成元年、岩波書店刊)より引用し、傍線を付す。
- (26) この作品は現存するが、平安時代末期頃の原作本(散逸)を鎌倉時代後半以降に改作したものと考えられている。三角洋一「海人の刈藻」(『物語文学』前掲(12))、阿部好臣「あまのかるも」(藤井貞和編『王朝物語必携』別冊国文学第32号、学燈社、昭62・9)、室城秀之「あまのかるも物語」(三谷栄一編『物語文学の系譜Ⅱ 鎌倉物語1』体系物語文学史第4巻、平成元年、有精堂刊)など参照。
- (27) 『海人の刈藻』の引用は、妹尾好信校訂・訳『海人の刈藻』(中世王朝物語全集2、平成七年、笠間書院刊)により、( )内に補足説明を加え、適宜傍線を施す。
- (28) 辛島正雄「解題」(前掲書(14))、斎藤菜穂子「小夜衣」(『中世王朝物語・御伽草子事典』前掲(2))など参照。
- (29) 『海人の刈藻』にも、継父母と継子の関係が描かれるが、これについては別に考察する。
- (30) 三角洋一「岩屋の草子」(『日本古典文学大辞典』第一巻、昭和五十八年、岩波書店刊)、濱中修「室町時代物語(御伽草子)」(『日本古典文学研究史大事典』平成九年、勉誠社刊)など参照。
- (31) 『岩屋の草子』の引用は、秋谷治校注「岩屋の草子」(『室町物語集上』新日本古典文学大系54、平成元年、岩波書店刊)による。
- (32) 伊藤慎吾「岩屋の草子」(『中世王朝物語・御伽草子事典』前掲(2))参照。
- (33) 徳田和夫「秋月物語」(『物語文学』前掲(12))など参照。
- (34) 『落窪物語』の引用は、三谷栄一・三谷邦明校注・訳「落窪物語」(『落窪物語・堤中納言物語』新編日本古典文学全集17、平成十二年、小学館刊)により、( )内に補足説明を加え、適宜傍線を施す。
- (35) 本稿で引用した新編日本古典文学全集(三谷栄一・三谷邦明校訂)の底本(実践女子大学図書館常磐松文庫所蔵旧安田文庫本)には「典侍は」のところ「てんやくのすけは」とあるが、校訂者が改めている。松尾聰校注「落窪物語」(『落窪物語・堤中納言物語』日本古典文学大系13、昭和三十二年、岩波書店刊。底本は寛政六年刊記の木活字本)では「内侍のすけは」としながら、前文の「今は内侍のすけなるべし」とその後「二百まで生ける」との「時」が矛盾する点などからこの部分を後人の補筆と推定している。いずれにしても諸注は二百歳の長寿者はあこぎであり、「典薬助」は誤写と見なしているようである。一方、藤井貞和「落窪物語 解説」(『落窪物語・住吉物語』前掲(25))には、典薬助が没したというのが「死にけり」不確かな伝承として記されていることから、「本当は典薬助は生きていて、なんと二百まで生きていたか言うことだ」という終わり方をしている可能性が重視され、新日本古典文学大系(25)の本文も「典薬助」のままにされている。以上のように、この結末の一文はきわめて不安定なものであるが、いずれの場合でも栄華を「見る」者の存在が必要とされていたという本稿の論旨に矛盾しない。
- (36) 前掲拙稿(10)。
- (37) 『大鏡』の引用は、橘健二・加藤静子校注・訳『大鏡』(新編日本古典文学全集34、平成八年、小学館刊)による。